

日本の保育者養成における「アクティブ・ラーニング」の課題

— スウェーデンのテーマ学習「尻尾のないペレ」を事例に —

The topic of “active learning” in Japanese early childhood educator training
– Based on an example of learning with “Pelle Svanslös” in Swedish preschool –

浅野 由子*
Yoshiko ASANO

要約 昨今、気候変動による自然災害は絶えず、益々環境教育やESD（持続可能な開発の為の教育）の需要は高まっている、そこで具体的に、如何に日頃の保育・教育実践を展開していくか内容や方法について、再度検討する必要がある。本研究においては、スウェーデンの保育者として筆者が関わったテーマ学習「尻尾のないペレ」による保育実践と「教育的ドキュメンテーション」を振り返りながら、その実態を分析、考察し、今後の日本の保育者養成において必要な「アクティブ・ラーニング」の課題について検討している。テーマは、子どもたちの住んでいる町（ウプサラ市）に住む尻尾のない猫（Pellesvanslös：尻尾のないペレ）の物語を題材に、1. 森林での読み聞かせの時間、2. 町の歴史的建造物と猫の物語を題材とするペレ公園の視察見学、3. 就学前学校での子ども達による物語の制作活動（新聞紙の張り子による自分の猫やケーキ、魚、ミルクのお皿の制作、iPadを利用して映像を撮影）を行い、保育者が、「教育的ドキュメンテーション」を取りながら、如何に保育者や子ども達の学習が展開していったか、その過程を紹介し、「5つの視点の環境認識論的モデル」から分析・考察している。

キーワード：持続可能な開発の為の教育、スウェーデン就学前学校ナショナル・カリキュラム、教育的ドキュメンテーション、日本の保育者養成、5つの視点の環境認識論的モデル

Abstract The importance of environmental education and education for sustainable development is increasingly needed because of unrelenting natural disasters due to climate change. The details of and methods with which to develop routine education and childcare will need to be re-examined. This study has examined the topic of “active learning” in Japanese early childhood educator training by reflecting on and analyzing the practices of Swedish preschools and pedagogical documentation. In Swedish preschool, the topic of active learning is brought up using the story of “Pelle Svanslös” [Peter No-Tail], a cat without a tail living in the city of Uppsala. Children participate in 1) Storytelling in the forest, 2) A field trip to Pelle Park featuring information about historical buildings in the city and Pelle’s story, 3) Creative activities for preschoolers (making one’s own Pelle out of papier-mâché, making cakes, fish, or a milk saucer, or using an iPad to film a movie). This study describes how learning by preschool teachers and children develops as preschool teachers refer to pedagogical documentation and it analyzes and discusses this process based on an “environmental epistemological model with 5 aspects.”

Key words : Education for sustainable development, Swedish National Curriculum for preschool (Lpfö 2018), Pedagogical documentation, Japanese early childhood educator training, Environmental epistemological model with 5 aspects

* 児童学科
Department Child studies

I はじめに

昨今、気候変動による自然や文化遺産の災害（洪水、山火事等）は世界各地で絶えず発生し、地球環境の持続性が危ぶまれている。益々環境教育やESD（持続可能な開発の為の教育）の需要は高まっており、具体的に、如何に保育や教育実践を展開していく必要があるのかについて、その内容や方法について、検討される必要がある。地球環境の「**持続可能性**」を維持していく為に必要な目標（**持続可能な開発の為の目標:SDGs**）が、2015年9月にニューヨークの国連で示され、グローバル・アクションの為の17項目が明示され、多様な視点から、グローバルな市民として行動する必要性が示唆され、その17項目の4番目には、「質の高い教育（Quality of education）」が挙げられて質の高い教育とは何か、その内容も検討される必要がある。文部科学省によれば、今後、新たな時代を生き抜くグローバル人材を育てるにあたり、如何に「アクティブ・ラーニング」を進めていくか、その内容と方法が議論されている。その用語の定義は、「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」とされ、ICTといった技術やプレゼンテーション能力の開発も進んでいる状況がある。OECD（経済協力開発機構）の21世紀を生きる子ども達のキーコンピテンシー（鍵となる能力）として、①道具を相互作用的に用いる力 ②異質な人々の集団で交わる力 ③自律的に行動する力の3つが挙げられ、ICTを使用する技術も考慮にいれながら、子どもの発達に合わせ、如何なる学習環境を提供するか?といった議論が今後、益々議論される余地がある。

これまで環境教育においては、その方法論として、環境の中で（In）、環境について（About）、環境の為に（For）といった考え方があった（Hart & Robottom 1993）が、今後のESDの方法としては、その3視点のみでは十分でなく、環境のモデルを通

すこと（Through）と環境の倫理と共に（With）教育するという新たな2視点が必要なことを、筆者は明らかにした。つまり、環境の中で（In）で教育すること（体験教育）と、環境について（About）教育すること（科学教育）を繋ぐ方法として、環境を通して（Through）教育すること、つまり、環境の「モデル」（「持続可能性」という抽象的な課題を具体化しているモデル）が不可欠であり、科学教育と環境の為に（For）教育する（実践教育）を繋ぐものとして、個人の倫理でなく、生態系をも含む環境倫理と共に（With）、つまり集団倫理が必要なことを明らかにし、それを、「5つの視点の環境認識論的モデル」として、ESDの環境認識論として提示した（浅野 2009）。本研究では、この「5つの視点の環境認識論的モデル」が、「アクティブ・ラーニング」を測る指標として有用とし、筆者が実践者として、保育・教育に関わりながら、その実態を記録し、分析・考察しながら、グローバルな時代を生きる子ども達の発達に合わせ、如何なる学習環境を提供する必要があるか?といった課題に差し迫る。

II 研究目的と方法

本研究では、ESDの先進国として知られているスウェーデンの就学前学校にて、どのような保育・教育が行われているのか、実践者として筆者がとった教育記録、すなわち「教育学的ドキュメンテーション」と自身の保育実践を振り返り、子どもと保育者の学習の過程を追跡することで、就学前学校における「アクティブ・ラーニング」の現状を分析・考察し、今後グローバル人材を育成するにあたって、必要となる保育・教育における学習環境について、検討する。

選挙投票率80%以上を誇る民主主義国家であるスウェーデンでは、教育において、民主主義教育が強調されることは言うまでもなく、男女平等、移民や障害者の統合、自然・環境保護といった問題と真剣に向き合い、持続可能な社会に向けて、真摯に向き合っている国である。前述したSDGsには、国・自治体・会社・学校・NGO団体が率先して取り組んでおり、ESDを中心に、グローバル人材の育成に向けての取り組みは、世界的にも知られている。義務教育前の就学前学校に通学する子どもも9割を超え、児童手当をはじめ育児休暇や病休休暇制度も整っているスウェーデンの就学前教育は、質の高い

保育と教育（エデュ・ケア）が行われている国としても名高い。（ユニセフ 2008）そこで、グローバル人材を育てる上で、必要となる「アクティブ・ラーニング」の基礎を如何に育てているのか、といった問題意識から、「民主主義」と「自然活動」の両輪に、就学前学校の ESD に取り組んでいると言われるスウェーデン（Klaar, Öhman 2012）に着目し、その疑問を明らかにする。

研究方法としては、自ら実践者としてとった教育記録「教育学的ドキュメンテーション」を振り返ることで、その実践を、「5つの視点の環境認識論的モデル」と言う視点から、分析・考察をする。それは、参与観察をするという意味で、アクション・リサーチでもある。

研究方法

対象期間 2018年9月～2019年5月

対象年齢 年長組（5・6歳）男女 計12名

対象場所 事例1）ウプサラ市の就学前施設近くの森林、事例2）ウプサラ市のペレ公園、事例3）就学前学校

1. スウェーデンの就学前学校について

スウェーデンの就学前学校（Förskola）は、1998年に管轄となった教育省（それ以前の管轄は、社会省）より、ナショナル・カリキュラム（Lpfö98）が発行され、生涯学習の基礎を培う機関として位置づけられた。1歳～6歳の子どもを対象とし、その後は、基礎学校（Grund skola）の就学前クラス（Förskola klass）、基礎学校、高校（Gymnasiet）、大学（Universitet）といった教育制度が整備されている。基礎学校は、7歳から15歳までの子どもを対象（9学年）とし、就学前クラス（0学年）を含め、10年間は義務教育期間である。2011年から就学前学校の活動が、学校法にも準じるようになってから、それまでの遊びを基本とする学びや生活に加えて、算数、言語、自然科学や技術といった文言が活動の目標（Lpfö2010）に明示され、教育学的視点が強化されるようになる。それに伴い、「教育学的ドキュメンテーション（Pedagogisk Dokumentation）」と呼ばれる写真や動画を可視化した保育や教育記録を追跡し、評価し、発展する（2.6 UPPFÖLJNING, UTVÄRDERING OCH UTVECKLING）という課題が、ナショナル・カリキュラムの一章に設けられ、子ども、保育者や保護者がその記録を通して、学び

合うという視点も強化されるようになる。その「教育学的ドキュメンテーション」について、Gunilla Dahlberg（1999）は、「『子どもの観察』に反して、教育活動の中で何が行われているか、それを期待とか基準といった規定の枠にはめないで、子どもに何ができるかを見たり理解するものです。（中略）それを作成することは、次の活動の基礎を築き、学びのプロセスを創り出します。また保護者に子どもの生活についての具体的な情報を提供する事が出来ます。さらに、それが保護者の参加や連携を促したり、意識を高めることにもつながります。」と指摘している。更に、最近改定されたナショナル・カリキュラム（Lpfö2018）には、特に、ITやメディアといったツールの活用や、持続可能な開発といった概念も明示されるようになり、新たなグローバル時代に生きる子ども達の能力の育成の目標（就学前学校では、到達する事が目的ではなく、到達するまでの過程を目的とする。基礎学校からは、到達目標となる。）が明示されるようになる。保育の質の体系的評価の義務づけは、学校法とナショナル・カリキュラムにおいてされており、評価の指標は、自治体や学校の裁量により、具体的な評価方法は「子どもかどのように物事を探求するか、疑問を持つか、経験をするか、関与するかを知る。また、子どもの知識がどのように変化するか、子どもたちがどんな時に楽しく、面白く、意義があると感じるかを理解することである。さらに、「どのような形の評価であっても、子どもの視点で実施されなければならない」と明記するとともに、「子どもと親は評価に参加すべきである」としている。

事例1）森林での物語の時間 背景

秋・春学期にテーマ学習で、ウプサラ市を舞台にした尻尾のない猫（ペレ）の物語を題材にすることが決まり、年少組・年中組・年長組に、プロジェクターを利用して、TVシリーズにもなっているアニメの物語の導入を上映した。その後、年齢の組による活動が展開された。年長組は、ペレの物語を既に読んでいる子どもが多かったことから、物語の原書（“Pelle Svanslös”，1960年代の本）を、森林活動の際に、保育者が毎回、「読み書きかせ」をする事にした。

森林に行く際に、子ども達は、必ず同じ子どもと

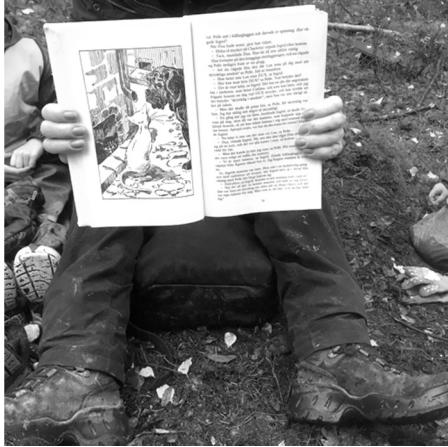


Table 1 A “Pelle Svanslös” book

手を繋いで歩き、森林に入るまでの道で、小枝を見つけて、森林に入る際の鍵とする。子ども達 12 人は、毎回同じ木の周り（ドア）に集まり、小枝（鍵）を持ち、森林の歌を、活動の前後に歌う。また、必ず同じ場所で、保育者が「読み聞かせ」を行う。

物語の内容-主人公の猫、尻尾のないペレは、田舎の農家で生まれ、その後、都会（ウブサラ市）の飼い主の家に貰われる。貰われた後、飼い主の家族と共に、汽車に乗って、他の都市（オレプロ市）に旅行に行く時の出来事を、保育者が章毎に読み聞かせをする。ペレは、生まれつき尻尾がないことから、意地悪な猫の友達（モンズ）に、馬鹿にされたり、虐められる経験をするが、優しいペレの人柄から、親友の猫達（マイヤら）に囲まれ、友達と問題を解決し、楽しい生活を送る。

結果（教育学的ドキュメンテーション）

森林に入る前には、子ども達は、常に同じ子どもと手を繋ぎ、鍵となる小枝を自ら見つけるという自立心を身に着けていて、それは、ナショナル・カリキュラムの目標である開放、尊敬、団結と責任を育てる（-Utveckla öppenhet, respekt solidaritet och ansvar）や、自立心や自信を育てる（-Utveckla självständighet och tillit till sin egen förmåga）事に繋がっていた。

森林活動の読み聞かせの際には、ペレの描写の際に、本で扱われている3つの古い言葉である、醜い（Narr）、戦う（Stred）、賞賛（Beröm）、価値のない（Värdelöss）に疑問を持った子どもがいたこと

で、その言葉の意味について討議をする。物語における子ども達の討議の中では、言葉の概念について、相手の意見を聞きながら、話し合うといった学習の過程が見られた。ナショナル・カリキュラムの目標の中には、相手の意見を聞いて、省察し、自身の理解を表現して、相手の意見を理解することを試みる能力を育てる（-utvecklar sin förmåga att lyssna, reflektera och ge uttryck för egna uppfattningar och försöker förstå andras perspektiv）という目標が掲げられており、子ども達の討議の中には、言葉の概念への理解や相手の意見を聞きながら、自分の意見を表現するといった民主主義の基盤となる態度が育っている様子が見られた。それはまた、ナショナル・カリキュラムの目標にある、シンボルへの理解と共に書き言葉への興味とどのようにそのメッセージを告げ、使う事が出来るかを育てる（intresse for skriftspråk samt förståelse for symboler och hur de används for att förmedla budskap）ことにも通じており、古い言葉の意味に概念に疑問を持つことによって、言葉への関心や興味を促すことにも繋がっていた。また活動全体を通して、相手を思いやるといった価値観の育成は、ナショナル・カリキュラムの基本的な価値観、身の回りにある生き物への尊敬や身近な環境への思いやりを育てる（Utveckla respekt för allt levande och omsorg om sin miljö）として掲げられており、それは、人間関係だけでなく、子ども達が、身近にある自然や動物への愛着や慈しみにも繋がる行動にも展開していた。

事例2）ウブサラ市の歴史的建造物と猫の物語を題材とするペレ公園（Pelle Svanslös parken）の視察見学

背景

ペレ公園は、猫の物語の舞台となるウブサラ市の中心に子ども達の為に作られた公園であり、公園には、ウブサラ市にある歴史的建築物であるウブサラの大教会やお城、警察、バス、お店やさん（魚屋、ケーキ屋さん）、バスといった遊具のモデルが置かれている。ペレ公園の地域には、物語の舞台になった猫の家があり、モデルハウスのような模型が置いてあり、子ども達は、公園で遊んだ後、その模型や歴史的建築物である大教会、お城、大学図書館、王室の家やバイキング時代の石碑を見学し、バスで戻る。見学後には、印象に残った背景を絵画にして、発表

する。



Table 2 Work produced after a visiting city

結果（教育的ドキュメンテーション）

子ども達は、物語という抽象的な世界を、現実
に具体化したペレ公園で、アップサラの大教会の滑り台、
お魚屋さんやケーキ屋さんのお店体験、バスや自転
車の運転手になって遊び、猫の物語のモデルの遊具
や物語の舞台（歴史的建造物）に触れて、物語の中
の地理や歴史的知識も得られた。例えば、猫の住ん
でいる住所を探す、アップサラ大教会の由来、バイキ
ングの石碑の由来について、子ども達で話し合った。
ペレ公園や施設見学によって、物語の世界を現実に
肌で感じることによって、子ども達の創造性が高まり、
確かな知識として、猫の物語理解が深まっていた。
ナショナル・カリキュラムの目標には、自身の
興味と要求と、遊びながら学ぶ能力を育てる
（Utvecklar sin nyfikenhet och sin lust samt förmåga
att leka och lära）という項目があり、子ども達は、
ペレ公園で物語を現実に肌で感じ、遊ぶ体験を通じ
て、ペレと友達が生活しているアップサラという都市
の文化や歴史にも、興味を抱いていることが、子ど
も達が、見学後に描いた絵について語る中でも、読
み取ることが出来た。ナショナル・カリキュラムの
目標には、創造する能力を育て、経験した出来事や
考えを遊び、絵、運動、歌や音楽、ダンスやドラマ
といった多くの表現方法を使って育てる（utvecklar
sin skapande förmåga och sin förmåga att förmedla
upplevelser, tankar och erfarenheter i många

uttrycksformer som lek, bild, rörelse, sång och musik,
dans och drama,）という項目があるが、子どもの絵
画を通して、その学習の過程を見ることが出来た。
子ども達は、物語におけるペレの世界を、ペレ公園
という町のモデルの遊具で体験した事によって、都
市の全体を理解する過程で、様々な部分である歴史
的建築物への知識を深めている様子が拝見出来た。

事例3）就学前学校での子ども達による物語（リサ
イクルの教材を利用して、物語のアイテムを
創作し、ICTを利用して写真を撮影し、映像を
録画）の制作活動

背景

ペレ公園を訪問した後、子ども達の提案で、ウ
プサラの大教会を実際に作りたいという意見が出た
為、ダンボール、牛乳パックで、大教会を作る。そ
の後、自分達の猫を作りたいという意見が出てきた
ので、新聞紙や広告紙を利用して、張り子を作り、
一人一匹、自分自身の猫を製作する。絵の具やビー
ズも飾りの際に利用する。猫が完成した後、猫の物
語（ペレと劇）を読んだ後、子ども達の意見で、自
分達の猫を題材にした猫の物語を作りたいという要
望があり、どのような物語にするか話し合う。話し
合いの結果、ペレの誕生日に、友達を読んで、ペレ
の好きなケーキやお魚、ミルクを食べて飲むとい
う設定となり、3グループに別れて、ケーキ、魚、ミ
ルクの皿を製作する。話の展開としては、友達
の意地悪猫（モンス）に、ケーキを盗まれたことが
わかり、大騒ぎになるが、原因として、モンスが
招待状を見ていなかったことがわかり、最後には一
緒にケーキや魚、ミルクを飲んで、皆でペレのお
誕生日をお祝をするというストーリーになる。子ど
も達から、ITを使用して、映像を作ることも意見
が出た為、保育者も援助しながら、子ども達の
作成した物語に沿って、保育者と子ども達の音
声を録音しながら、「ペレのお誕生日」という題
の物語を作成した。

結果（教育的ドキュメンテーション）

春学期には、ナショナル・カリキュラムの中の
「子ども達の影響（Barn Inflytande）」に重点を
置いて、活動を展開したが、子どもの想像性のある
物語を映像にするというダイナミックな活動を展
開することとなった。例えば、ナショナル・カリ
キュラムの中の様々な技術や教材や道具を使っ
て、構築した



Table 3 Film produced on an iPad

り、創造して、構成する能力を育てる。(förmåga att bygga, skapa och konstruera med hjälp av olika tekniker, material och redskap.) や、教材を使用する際に、新聞紙やダンボール、牛乳パックやプラスチックといった環境に優しい素材を使用することも、日常生活において如何に人々が持続可能な開発に貢献するということへの理解 (förståelse för hur människors olika val i vardagen kan bidra till en hållbar utveckling) を促すことにも関連していた。

更に、製作活動中には、ダンボールを真四角に切る、魚のお皿を丸く切るといった活動は、算数的な概念への理解を促し、子ども達、自ら、その形への興味を示してきた。更に、絵の具の色を配色する際に、色のニュアンス(薄い・濃い)により、色の配合を調整するといった子どもからの提案があり、化学反応への興味を伺うことが出来た。それは学習の過程で、ナショナル・カリキュラムの目標、分別し、形づけ、探索し、算数の概念や概念の関係を使用する能力を育てる (förmåga att urskilja, uttrycka, undersöka och använda matematiska begrepp och samband mellan begrepp) や、植物や動物や簡単な化学や物理的の過程といった自然科学への理解を育てる (förståelse för naturvetenskap, kunskaper om växter och djur samt enkla kemiska processer och fysikaliska fenomen) ことにも繋がっていた。

IT への興味は、自分自身の猫の写真を撮影することから始まり、切り貼りする作業をコンピューター上で行う作業も、子ども達は、自主的に行うことになった。映像を撮る際には、子ども達がそれぞれ意見を出し合い、子ども同士で助け合うことを通して、物語を撮影する様子も見られた。ナシヨナ

ル・カリキュラムの目標の中には、2016年からは、ICT等のメディアやプログラミング化といった目標が掲げられており、就学前学校は、小説、絵や文章やその他のデジタルのメディアへの関心を高め、それらを使ったり、解釈したり、語ったりする能力を育てる (intresse för berättelser, bilder och texter i olika medier, såväl digitala som andra, samt sin förmåga att använda sig av, tolka, ifrågasätta och samtala om dessa, Lpfö 2018) が強調されている。

本テーマでは、子どもの興味関心から、自然な形で、iPad を利用した映像撮影に取り掛かることになった。子ども達のICT使用能力は、予想以上に高く、家庭で使用している子どもとそうでない子どもに差が見られた。映像の撮影に際しては、子どもの集中力や協調性が試され、順番を守りながら、一つの目標に協力して取り組む姿も見られた。

V おわりに

就学前学校におけるテーマ「尻尾のない猫」による学習における「教育的ドキュメンテーション」から、今後のグローバルな時代に生きる子ども達の質の高い教育について、「5つの視点の環境認識論的モデル」から、全体的考察をする。まず、1) 森林活動(自然) 2) 施設見学(都市社会)において、循環する森林(自然環境)と歴史のある街(社会環境)の中で(IN) 子ども達は体験や遊びを通して学び、持続可能性のモデルとなる森林やベレ公園(抽象的な概念を具体化するモデル)を通して(THROUGH)、自然科学や社会科学の知識について(ABOUT)学び、3) 就学前学校の活動では、物語を自分達の手で制作したいという子ども達の意図から、自分の猫を主体的に創作し、グループで共同作業を行い、最後は、子ども達全員で協力して、映像を撮影するといった「アクティブ・ラーニング」(課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び)の過程を見ることが出来た。それは、1) 2) の前提があり、環境である自然や社会の環境倫理(集団倫理)を守ると共に(WITH)、持続可能な自然や社会(環境)の為に(FOR)実践が出来たからであると言える。日本の保育者養成において特に強調されてきている「幼児期の終わりまでに育てたい10の姿」(2018)は、事例1) 2) 3)においても関連し、子どもの主体性を活かした学びの環境の事例として大変参考になる。

こうした「アクティブ・ラーニング」が展開した背景として、西洋的な個人主義、子どもの権利を保障し、DIY (DO IT YOURSELF) を特徴とする国柄から、子どもの自主性や自立心を重んじている為、個人や他者の意見や権利を尊重した民主主義的な課題解決を常に行なうという、スウェーデンの保育・教育活動の基礎があることが言える。それは、2014 年をピークに、多くの移民や難民を受け入れ、様々な国を背景に持つ子ども達にもスウェーデン人と同等の教育を受けさせることを徹底していることからわかる。また、森林が国の半分以上を占め、人口密度も 20 人/Km² という自然環境で、アレマンズレットン（自然享受権）という自然を楽しむ守る義務がスウェーデンの特徴的な文化としてあり、人々に自然や地域資源（歴史・文化遺産）を守るといった環境保護意識が高く、その自然や地域（歴史・文化）資源を、日頃から守ろうとする活動を、学校施設だけでなく、自治体をはじめ企業や団体も協力して行なっていることも背景としてあるだろう。例えば、毎年、春先の雪解けの時期（4、5 月）に、スウェーデンの環境 NGO 団体「スウェーデン環境保全団体（HÅLL SVERIGE RENT, Sweden Keep Tidy）」が、学校に清掃活動と呼びかけて、自然保護活動を促進する試みは、学校と NGO 団体が協力して、運動を起こす意味で、良い例である。

以上のように本研究では、スウェーデンの就学前学校における「アクティブ・ラーニング」の実態を、自ら実践者として行なったテーマによる学習の「教育学的ドキュメンテーション」から、分析と考察してきた。実践者そして研究者として、今後のグローバルな時代を生きる子ども達に提供できる学習環境を、如何に提供するかという問題意識に戻って再考すると、それは、今後これまでの学校を中心に行われてきた環境教育や ESD では手に負えない自然や社会の課題が多く発生することから、学校が、自然や社会（家庭・地域）環境と、共同で学習をする機会を生産していくことが必要であるということである。

OECD（経済協力開発機構）では、代表的な 21 世紀型の学力のあり方を能力（コンピテンシー）として提案し、特に、すべての人にとって重要とする鍵となる能力をキーコンピテンシーとして提唱しているが、幼児期から自然と社会「環境」にアクティブに関わっていく本事例は、まさに子どもが新しい

時代に生きる力を育てる意味でも意義深いものと考ええる。更に、地球環境の持続可能性を 2030 年までの SDGs の 17 の項目と同時に、ESD（持続可能な開発の為の教育）で目指される教師や保育者の力量の目標として、Kathie Martin (2018) は、以下のように述べている。

“The power of the teacher comes not from the information she shares but from the opportunities she creates for students to learn how to learn, solve problems and apply learning in meaningful ways”

つまり、教師の力量は、共有する情報ではなく、生徒が、どのように学ぶかを（教師自身が）学び、問題を解決し、意味のある方法で学ぶことを創造する機会にある、というのだ。子どもへの知識の提供のみならず、子どもの創造性にも目を向けながら、教授者だけでなく、学習者としても、教育の機会を創造することが、今の教師や保育者に求められている。それは、思考共有支援（SST: sustained shared thinking, Siraj-Blatchford, 2007）、つまり、保育者が子どもたちの考えやアイデアをつなぎ、課題解決に向けた方法や技術を協働で見つけ出すことを支えることでもある。

謝辞・備考

本研究にご協力いただいたスウェーデンウプサラ市私立マルマ・バッケ就学前学校の職員ならびに子ども達に、この場を借りて御礼申し上げます。尚、この研究は、科学研究費基盤研究 C「グローバルとローカルの持続可能性を融合する GAP のモデル開発（18K02549）」（研究代表者浅野由子）の研究助成を受けているものである。

引用文献

- ・SDGs（持続可能な開発目標）外務省
https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/about_sdgs_summary.pdf
 （2019 年 6 月 2 日アクセス）
- ・Robottom.Land and Hart. P 1993, Research in environmental education. Engaging the debate. Geelong. Vic: Deakin University
- ・浅野由子, 2009, 『日本とスウェーデンの「持続可能な社会」を目指す幼児期の「環境教育」の意義 – 5つの視点の環境認識論的モデルを通して-』, 日本女子大学博士学位論文

- ・ユニセフ イノチェント レポート 8 2008
https://www.unicef.or.jp/library/pdf/labo_rc8.pdf
(2019年6月2日アクセス)
- ・アクティブ・ラーニング, 文部科学省, http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf
(2019年6月2日アクセス)
- ・Klaar, Susanne & Öhman, Johan. 2012 Children's meaning making of nature in an outdoor-oriented and democratic Swedish preschool practice. Accepted for publication in *European Early Childhood Education Research Journal*.
- ・スウェーデンナショナル・カリキュラム
Läroplan för förskolan (Lpfö 18)
<https://www.skolverket.se/download/18.6bfaca41169863e6a65d5aa/1553968116077/pdf4001.pdf> (2019年6月2日アクセス)
- Gunilla Dahlberg, Peter Moss and Alan Pence (1999) Chapter 7 Pedagogical Documentation: Beyond Quality in Early Childhood Education and Care- Postmodern Perspective, Falmer Press, p146.
- ・幼稚園教育要領 (2018) フレーベル館
- ・スウェーデン環境保全団体 (HÅLL SVERIGE RENT, Sweden Keep Tidy) (2019年6月2日アクセス)
<https://www.hsr.se/kommun/vi-haller-rent>=-2019
- ・OECD (2005) "THE DEFINITION AND SELECTION OF KEY COMPETENCIES" pp.5-15
- ・Martin, Katie 2018 . *Learner-Centered Innovation*. IMPress
- ・白石淑江 2017 子どもの最善の利益をめざすスウェーデンの保育 Early Childhood Education and Care in Sweden Aimed at the Best Interests of the Child 愛知淑徳大学論集-福祉貢献学部篇-第7部
- ・Siraj-Blatchford, I. (2007). Creativity, communication and collaboration: The identification of pedagogic progression in sustained shared thinking. *Asia-Pacific Journal of Research in Early Childhood Education, 1*, 3-23.